大自然の魔法師アシュト、廃れた領地でスローライフ3

さとう
SATOU

Illustration
Yoshimo

CHARACTERS
主な登場人物
ルシファー
魔界都市ベルゼブブの市長。とんでもない秘密を抱えている!?
シエラ
イタズラ好きな神話七龍のお姉さん。アシュトを優しく見守る。
エルミナ
希少種族ハイエルフの美少女。こう見えて大のお酒好き。
アシュト
本作の主人公。魔法適性が「植物」だったために家を追放され、魔境オーベルシュタインの領主となる。
フレキ
アセナの兄。薬師のタマゴとして、アシュトの弟子となる。
アセナ
ワーウルフ族の少女。なぜか早く大人になりたいらしい。
シロ
ユグドラシルを守るフェンリルの子供。アシュトと遊ぶのが大好き。

皆さん、こんにちは。俺の名前はアシュトと言います。たまには礼儀正しく、敬語で自己紹介をさせてください。

俺はビッグバロッグ王国の大貴族エストレイヤ家の次男坊だったのですが、魔法適性が『植物』という微妙なものだったために、父から「落ちこぼれは必要ない」と言われ、未開の森オーベルシュタインに追放されることに。俺は途方に暮れながらも、オーベルシュタインでのんびりとした第二の人生を過ごそうと決めたのでした。

そこは自然が豊かな場所で、俺の『植物』魔法は大活躍。しかもひょんなことからハイエルフやエルダードワーフ、デーモンオーガといった希少な種族が集まり、村ができて……いつの間にか村長と呼ばれるようになりました。

最近は、新しい種族がまた増えました。

花の妖精ハイピクシー、鉱山採掘のプロであるブラックモール族、ちょっと胡散臭い闇悪魔族や、全身が真っ赤な鱗に覆われているサラマンダー族などなど……気付けば村は希少種族だらけです。

さらに、ビッグバロッグ王国の同盟国である『ドラゴンロード王国』のお姫様、ローレライとクララベルの姉妹も村にやってきました。この二人は来たというか、大怪我して運ばれてきたってのが正しいですけどね。

その他にもエルダードワーフたちが村に巨大図書館を造ってくれたり、村の近くにある巨大な湖

に出現した大マナズを退治したりと、のんびりとはかけ離れた出来事が続出。
俺はスローライフを送りたいんだけど……やっぱり、トラブルってのは続くんだよなぁ、と思う今日この頃です。

第一章　人狼（ワーウルフ）の訪問者

それは、突然やってきた。
「た……助けて、ください」
サラマンダー族が、酷（ひど）い怪我をした見知らぬ男性を俺の家に運んできた。
なんでも、村の入口で倒れていたそうだ。
診察室に連れていき、さっそく治療を開始する。
「……怪我、だけじゃないな」
男性は全身に裂傷（れっしょう）を負い、そして……深刻な栄養失調に陥（おちい）っていた。肋骨（ろっこつ）が浮き出るほどやせ細っている。
俺は一番怪我が酷い背中にハイエルフの秘薬を塗って治療したあと、ハーブスープを飲ませてやる。弱った身体には三種のハーブを混ぜたスープが一番。殺菌作用、体力回復の効果があり、何より美味（うま）い!!

おっと、そんなことはどうでもいい。
俺は安心させるように、男性に言う。
「魔獣（まじゅう）にやられたようですね。ゆっくり休んで回復したら、住んでいる場所まで送りますよ」
「……はい。あの、あなたはこの村の……？」
「はい。村長のアシュトです」
「おお、噂（うわさ）の村長ですか!!」
「は、はぁ……噂がどんなものかわからないけど、たぶんそうです」
今までにも何度か「噂の村長」と呼ばれていたし、まあ今回も俺のことだろう。
男性は、ベッドの上で頭を下げた。
「お願いします!!　どうか、うちの村を救ってください!!」
「え？」
「実は……うちの村に、疫病（えきびょう）が発生したのです」
「……詳しく聞かせてください」
男性から「疫病」という単語を聞いた瞬間、頭の中で薬の在庫数を数えながら説明を求める。
男性は「はい」と頷（うなず）き、話しだす。
「私はヲルフ。ワーウルフ族です」
「ワーウルフ族？」
「はい。今は人間の姿ですが、このように……」

「おお!?」
ヲルフと名乗った男性の全身に獣のような体毛が生え、牙が生え、耳が生え、人型の狼になった。
灰色の毛並みの狼人間だ。身長も伸びているように感じる。
「……人狼の姿にも変身できます。獣人でも亜人でもない、ワーウルフという種族だと考えていただければ」
「は、はい」
ヲルフさんは、再び人間の姿へ。ちなみに人狼になっても怪我は治らないらしく、裂傷はそのままになっていた。
「それでヲルフさん、疫病ということですが」
「はい。村の中を流れる川がバイオスライムに汚染されたのです。川の飛沫を浴びた者や、水を飲んだ者が病におかされ……今は全員、家から出ることもできずに苦しんでおります。私だけが唯一、疫病にかかっていなかったので、飲まず食わずで住人の看病をしていましたが……もう、どうしようもなく、助けを求めてここまで来たのです」
「そうだったんですか……ところで、どうしてここに村があると？」
「最近、キングセンティピードが大きな箱を紐で括り付けて移動しているのを見たので、近くに人里があるのかと思いまして……その通り道に沿ってここまで来たのですが、魔獣に襲われて……命からがら、逃げてきました」
「なるほど……」

確かに以前、キングセンティピード——ムカデのセンティがワーウルフ族を見たと言っていた。あれはヲルフさんの姿だったのかもしれない。背中の怪我はやはり魔獣によるものか。
とにかく、話はわかった。
「わかりました。怪我がお辛いでしょうけど、もう少しだけ質問に答えてください。村の住人を助けましょう」
「……はい!!　ありがとうございます」
まずは、情報収集だ。

◇◇◇◇◇◇

ワーウルフ族の村は、この村からヲルフさんの足で三日ほど走った距離にあるらしい。意外と近いことに驚いた。
村には川が流れ、その川の水を引いて行う農業がメイン産業とのこと。だが、バイオスライムという人体に有害な成分を持つ魔獣が川に棲み着き、水が汚染。農作物は全滅し、村人もバイオスライムの毒素にやられてしまったそうだ。
対策としては、バイオスライムの駆除と住人の治療。
バイオスライムを駆除すれば、ひとまず川の水は数日後には綺麗になる。
だが、問題は畑の方だ。大地が汚染されれば浄化は容易ではなく、数年から数十年は作物が育た

なくなってしまう。
少し悩み……思いつく。『緑龍の知識書（ムルシエラゴ・グリモワール）』に畑を浄化する魔法が載っているんじゃないか？
「いやいや、さすがにそこまでは……」
俺は『緑龍の知識書（ムルシエラゴ・グリモワール）』を出現させ、本をめくってみる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『植物魔法・基礎』
○土壌回復（アースヒール）
土が汚染されちゃって農作物が育たない!!（泣）
なら……回復させちゃおう!!
この魔法は土壌の毒素を分解して、栄養にしちゃう♪
美味（お）しい農作物、期待しているからね♪

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あるんかい!!　じゃあついでにバイオスライムについても調べるか……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

○バイオスライム
毒を持ってる紫色のスライム!!
川に棲み着く厄介者。捕獲しても食べられません♪
弱点はなんと……お塩!!
川にちょっぴりお塩を混ぜるとジュワジュワ～って消えちゃいます♪
水の味に敏感だから、一度浄化するともう安心。二度とそこの川には棲み着かない!!

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……なるほど、塩か」
念のため、うちの村近くの川にも塩を溶かしておこう。
とりあえず、これで対策方法はわかった。
まず、バイオスライムの毒を中和する薬を調合する。幸い、シエラ様こと緑龍（りょくりゅう）ムルシエラゴ様からもらった本の中に、その情報はあった。材料も村にあるものや近くに自生している薬草だったので、なんとかなりそうだ。
ヲルフさんの村には二百人ほどのワーウルフが暮らしているらしい。最低でも二百人分以上の薬を調合しなくちゃいけない。
俺は身の回りの世話をしてくれている銀猫（ぎんねこ）族のシルメリアさんに頼み、村の住人たちを集めてもらい「ワーウルフ族の村を救うから手を貸してほしい」と伝える。すると、全住人が迷わず手を貸してくれると言ったので驚いた。

さっそく数グループに分け、解毒剤に必要な薬草を採取してもらったり、炊き出し用の野菜や新鮮な魔獣の肉を準備してもらったりする。

センティの運搬用箱に炊き出し道具を積み、手の空いた人には解毒剤の調合を手伝ってもらった。

こうしている間にも、どんどん時間は経過していく。早く行かないと病にかかった人々が衰弱死する可能性もある。

俺はデーモンオーガのバルギルドさんとディアムドさんに、ワーウルフ族の村に先行するようにお願いした。

この二人は毒が効かない体質だから、バイオスライムの駆除を頼んだのである。

塩水を作り、川の上流から流すだけなので簡単だ。

ヲルフさんはまだ治療を受けたばかりだったが、村までの案内を買って出た。なかなかの根性だとディアムドさんは褒めていた。

ヲルフさんはバルギルドさんに背負われることに。

そして三人は村を発ったのだった。デーモンオーガの二人のスピードなら、数時間で目的地に着くだろう。

俺たちも大急ぎで薬の調合と荷作りを進める。

準備をしている間、先発隊としてワーウルフ族の村に行くメンバーも選定しておいた。

まずは当然、俺。それに加えて魔犬族のベイクドさん、護衛としてデーモンオーガのノーマちゃんとキリンジくん、銀猫族が二十人ほどだ。

センティに乗れる人数には限りがあるからな。まずはこのメンバーを運んでもらい、あとから追加の人員を連れてきてもらう予定だ。

ベイクドさんを最初に連れていく理由は、ワーウルフ族の村までの道案内をしてもらうためだ。

魔犬族の嗅覚は、全獣人の中でもトップクラス。バルギルドさんたちの匂いを追跡すれば、道中で迷うことはない。あとは通った道をセンティに覚えてもらい、往復する。

日が暮れる少し前に、物資の準備ができた。

運搬用箱に荷物を積み、俺たちが乗る用の箱と一緒にセンティに括り付ける。着く頃には真っ暗になるだろうが、そんなことは関係ない。毒の治療は一分一秒を争うからな。

よし、ワーウルフ族を助けるぞ!!

第二章　ワーウルフ族を救え!!

箱に乗り込む直前、俺はキリンジくんとノーマちゃんに言う。

「キリンジくん、ノーマちゃん、護衛をよろしくね」

「任せてくれ。父さんほどじゃないけど、毒の耐性もあるから、万が一の時には駆除も手伝える」

「あたしだって頑張るよ!!　道中で魔獣が出てきたらみんなのお土産にしてやるんだから!!」

実に頼もしいね。

続いて、ベイクドさんにも声をかける。
「ベイクドさん、道案内はよろしくお願いします」
「ああ。全獣人中、最高と呼ばれている魔犬族の嗅覚を見せてやろう」
「はい。あとは銀猫族のみんな、向こうに着いたら寝る暇もないくらい忙しくなると思う。よろしく頼む!!」
「「「はい、ご主人様」」」
ベイクドさんに銀猫族のみんな。
今回は俺だけじゃない、住人全員の力が必要だ。
俺は見送りに来ていた人々にも話しかける。
「エルミナ、シェリー、ミュディ、俺が留守にしている間、村のことは任せたぞ」
「任せなさい。それより、あんたも気を付けなさいよ」
「お兄ちゃん、頑張ってね」
「アシュト、気を付けてね」
ハイエルフのエルミナ、幼馴染みのミュディ、妹のシェリーがそれぞれの言葉で激励してくれた。
「ああ。任せろ」
村のことは彼女たちに任せれば安心だ。
続いて、ローレライとクララベルにも挨拶した。
「ローレライ、クララベル、子供たちをよろしくな」

「ええ。アシュト、気を付けてね」
「お兄ちゃん、怪我しちゃヤダよ？」
「うん、行ってくる」
俺は先発隊メンバーと一緒にセンティの箱に乗り込む。
「センティ、往復で大変かもだけど、よろしく頼む」
『任せてください、ワイの逃げ足を見せたるで!!』
「いや、逃げ足じゃないけどな……」
まあいいか。先発隊、ワーウルフ族の村に向けて出発だ!!

◇◇◇◇◇◇

相変わらず、センティの乗り心地は最悪だった。
到着したのは夜遅く。
立ち並んでいる家は、一軒一軒明かりが灯っている。村の全容はよくわからないが、とにかく片っ端から治療していこう。
センティから降りて歩きだすと、村の中央広場にバルギルドさんとディアムドさん、杖をついたヲルフさんがいた。
「遅くなりました!!」

「村長、水の浄化は完了したぞ」
「塩水を流したらバイオスライムは溶けてなくなった。試しに水も飲んだが、問題ない」
バルギルドさんとディアムドさんが言った。
「わ、私も飲んだが、特に異常はなかった……くっ」
ヲルフさんも苦しげに言い、怪我が痛むのか傷口を手で押さえる。
「お前はもう寝ていろ。怪我人のくせに頑張りすぎだ」
ディアムドさんはヲルフさんを担いで、近くの建物に入った。どうやらそこがヲルフさんの家らしい。
俺はみんなの前に立ち、大声で指示を出す。
「さっそく治療を開始します!!　バルギルドさんはセンティから荷物を降ろしてください。銀猫族たちは教えた通りの手順で、ワーウルフたちに薬を飲ませて!!　手分けして行くぞ!!」
銀猫族たちが解毒剤を持って、明かりの点いている家に向かう。
バルギルドさんには荷降ろしが終わったあと、村の中央に櫓を組んで火を熾してもらった。大きな篝火は安心感を与えるし、これから来るであろう後続組への目印にもなる。
俺もスライム製試験管に入った解毒剤を持ち、近くの家に入る。
中には、やせ細ったワーウルフ一家が寝込んでいた。
父親、母親、女の子だろうか。熱にうかされて苦しんでいる。
さっそく吸い飲みに解毒剤と三種のハーブ粉末を入れ、ぬるま湯で溶かして混ぜた。これなら解毒しながら体力を回復できる。
俺は女の子を抱き上げる……軽いな。
「ふぁ……」
「大丈夫？　ほら、ゆっくり飲んで……ゆっくり、ゆっくりね」
「ん、ふ」
少女は、こくんこくんと解毒剤を飲んだ。
父親と母親にも同じように飲ませ、様子を観察する。
「……よし、呼吸が安定。青ざめていた顔色も戻ってきた。解毒剤が効いたみたいだな」
少しだが、体力も回復しただろう。
このまま熱が下がれば安心だ。
「よし、次の家に行くぞ」
俺は、片っ端から解毒剤を飲ませて回った。

◇◇◇◇◇◇

「なんとか、解毒は終わったか」
銀猫たちの協力もあり、ワーウルフ族全員の毒の治療が終わった。
幸い、死者はいなかった。ワーウルフ族が体力のある種族で助かった。

解毒剤を飲ませてからも油断できない。その後も、俺は徹夜で村中を回った。
真夜中に後続組の銀猫族が来たので、先発隊の銀猫族と交代させて看病に当たらせる。
やがて太陽が昇り始めた頃、全員が峠を越したことを確認する。
俺は朝日を浴びながら、全ての銀猫たちとバルギルドさん、ディアムドさん、ベイクドさんを集めて指示を出した。
「手分けして次の作業に移る。まず先発隊は家を回って、患者の身体を拭いてあげてくれ。服や下着、布団やシーツも交換してほしい。後続組は炊き出しの準備を頼む。デーモンオーガの皆さんとベイクドさんは、もう一度川のチェックをお願いします」
再び、作業が始まった。
村の中央に即席の竈を作り、消化のいいシチューを大量に用意する。今朝、様子を見たら、お腹を空かせているワーウルフがたくさんいたからね。
指示を出したあと、俺は怪我をしているヲルフさんの家に診察へ行く。
中に入ると、ベッドにうつ伏せで寝ていたヲルフさんが起き上がった。
「アシュト村長!!」
「そのまま動かないで。怪我の具合を診察します」
そう言って、傷口をチェックする。
とりあえず、怪我は大丈夫みたいだ。
明日には背中に塗っておいた薬液が固まって、剥がせるようになるだろう。

「あの、住人は」
「大丈夫。一人も死者はいません。みんな快方に向かっていますよ」
「おぉ……」
「さ、怪我を治すためにも栄養を摂らなくちゃ。もうすぐ炊き出しの準備ができますから、食事にしましょう」
「はいっ……ぐ、ぅぅ」
あらら。ヲルフさん、泣きだしちゃったよ……ま、この人が一番頑張ったからな。
さて、村人はこれでよし。

第三章　新たな食材との出会い

持ち込んだ食材をふんだんに使い、身体に優しいシチューをタップリ用意する。
シチューが出来上がる頃にはワーウルフ族の男性はなんとか動けるようになり、自らの足で取りに来た。女性や子供たちの分は銀猫族に運んでもらう。
なお、シチューは好評だった。何せ、料理上手の銀猫族が作っているんだからな。
俺もシチューをもらい、村の中央にある篝火の近くで食べる。
そこで、ようやく村の姿を落ち着いて見てみた。

まず、家の形が見慣れない。
屋根に藁のような植物を使っており、壁は木の枠組みに粘土のようなものを塗りつけて乾燥させている。うちの村とは建築方法が全然違う。
「ドワーフを連れてくりゃよかったな」
と、独り言。まぁ家は別にいいや。
それより、問題はまだ残っている。
ヲルフさんに確認したら、村の食料の備蓄はそこそこあるらしい。バイオスライムに汚染された水を引いた畑も、俺の魔法で整備すれば問題ない。
ただ、次の作物を収穫できるようになるまで、備蓄だけで過ごさなきゃならないのは辛いだろう。
その時、横から声をかけられる。
「アシュト様、よろしいですか」
「あ、はい」
「初めまして。ワーウルフ族のヴォルフと申します」
俺に頭を下げたのは、体格のいい男性だった。
確か、診察中に見た顔だな。寝たきりだから身長とか気にしてなかったけど、かなりデカい。
「情けない話ばかりで申し訳ないのですが」
「村の食料、ですね」
「はい」

俺はシチュー皿を近くの銀猫族に渡し、ヴォルフさんと話を始める。ちなみにヴォルフさん、ヲルフさんのお兄さんだそうだ。
「ワーウルフ族の主食である『コメ』は川が汚染される前に収穫を終えましたので、備蓄は問題ないのですが……その他の農作物は収穫前だったために全滅してしまいました。狩りをするにも、腕の立つワーウルフはまだ動けず……」
「わかりました。農作物はうちの村で手配します。肉はデーモンオーガの方々に狩りをしてもらい、保存が利く燻製を作りましょう。ワーウルフたちが体力を取り戻すまで……そうですね、二十日分ほどの肉があればいいでしょうか？」
「え……あ、ね、願ってもないお話ですが、その」
「じゃあさっそく手配します。無理のない範囲で、動けるワーウルフたちを集めて燻製の準備をお願いできますか？」
「は、はい」
「よし。じゃあ俺は畑の整備をしますか」
俺は村の外れにあるという畑地帯へ向かいながら、思った。
「……コメってなんだろう」

◇◇◇◇◇◇

バルギルドさんたちに狩りをお願いしたあと。
一人で畑にやってきたはいいが、俺は目の前の光景に首を捻っていた。
農作物が腐っている方の畑はまぁいい。『土壌回復』をかけて土を混ぜ合わせれば肥料になるはずだ。
問題は、『コメ』とやらを収穫した方の畑である。
「うーん……なんだろう、畑というか……」
原っぱみたいだな、というのが最初に浮かんだ感想。
やたら広くて、藁のような草を刈り取った跡が残っている。
整備しようにも情報不足だ。ヴォルフさんを連れてくればよかった。
「さて、と」
『緑龍の知識書』を開き、改めて使う魔法を確認して杖を構えた。
俺の見える範囲の畑を指定して呪文を唱える。
「愛おしい我が大地、不浄なる大地、恵みの大地、全部まとめてひっくり返れ、『土壌回復』」
毎度思うが、この変な呪文はなんとかならないのか？
すると、大地が爆発した。
「ぬぉぉぉぉーーーーっ!?」
違う、爆発したんじゃない。
指定した範囲の畑が、まるで渦潮のように回り始めた。

腐っていた農作物も細切れになり、大地と混ざり合っていく。
何これ、こんなド派手な演出だなんて聞いてないぞ!?
ギュゴゴゴゴァァァァーーーーッ!!
地上では絶対に聞けないだろう音だ。腰を抜かしてしまった。情けない。
「アシュト様、一体何を!?」
「うお、ヴォルフさん、これはその」
ヴォルフさんと動ける数名のワーウルフが音を聞きつけてやってきた。
そして、回転している畑を見て驚いている。当たり前だよな。
次第に渦が弱まり、音がやむ。
すると腐った農作物のあった畑に、フッカフカの土ができていた。
ヴォルフさんと数名が、畑の土に触れる。
「すごい、こんな上質な土は初めて見る……！」
「フワフワだぜ!!」
「鍬でここまでやるのに、どれくらいかかるよ？」
「いや、無理だろ」
な、なんか感動してる。
ヴォルフさんが俺に手を差し伸べた。ゴツく豆だらけの手は、畑仕事を長年やってきた証だろう。
俺はその手を掴んで立ち上がる。

「アシュト様。これほどの土を一瞬で作り出すとは、感服しました」
「は、はい。ええと、大地の汚染も消えたはずですので、このまま農業を再開して構いません。でも皆さんはまだ衰弱していますので、あまり無理はなさらぬように」
「はい!!　ありがとうございます。ワーウルフ族を代表して礼を言わせていただきます」
その後、ヴォルフさんに案内してもらい、他の場所にあった畑にも『土壌回復（アースヒール）』を使う。
こうして、ワーウルフ族の畑は全て回復した。
川を確認して戻ってきたバルギルドさんたちによると、バイオスライムの影響も完全に消えたようだ。塩だけでこうも変わるとはなぁ。

それから村に滞在し、炊き出しを行いながら経過観察すること……四日間。
驚くことに住人全員が回復した。どうやらワーウルフの回復力は、獣人や亜人に匹敵（ひってき）するらしい。
ヲルフさんも怪我が完治し、炊き出しを手伝っている。
住人の中で最も症状の重かったのはワーウルフ族の長老だったのだが、彼も無事元気になった。
俺は今、長老の家に上がり、すっかり健康になった長老と向かい合っている。
「アシュト様。ワーウルフ族の危機を救っていただき、誠に感謝しております」
「いえ。死者が一人も出なくて安心しました」
大人も子供も老人も、誰も死ななかった。
ワーウルフ族が体力に恵まれた種族だからかもしれないが、それでも犠牲（ぎせい）が出なかったのは素直

に嬉しい。
「お礼に我々にできることがあれば、なんでも仰（おっしゃ）ってください」
「そうですね……では、いくつか質問をしてよろしいでしょうか？」
「構いません。なんなりと」
「では、『コメ』ってなんでしょうか？」
ずっと治療に忙しくて聞けていなかったが、けっこう気になっていたことだ。
俺の知らない農作物。もしかしたら新たな交易（こうえき）ができるかも。
「コメとは、我らワーウルフ族の主食です」
「主食？　パンのような？」
「現物をお見せした方が早いでしょう。もうすぐ夕食の時間です、よろしければワーウルフ族の料理をお召（め）し上がりください」
「では、お言葉に甘えて」
ワーウルフ族の主食か……なんだろう。

◇◇◇◇◇◇

その日の夜。俺たちは村の中央広場に設けられた宴席用のテーブルについていた。
外に準備した竈で、すっかり回復したワーウルフの奥さんたちが、コメとやらを使った料理を

作っている。
銀猫族たちは案内された席に大人しく座っているが、もてなされるのに慣れてないのか、手伝いたそうにウズウズしている。
俺の隣には、回復したヲルフさんがいて、竈の脇に置かれてある白くて小さな粒を指さした。
「アシュト様、あれが我らの主食である『コメ』です」
「へぇ。あの白いやつが、ですか？」
「ええ。あれを炊くとふっくら柔らかに仕上がるのです」
「はぁ、なるほど」
それっぽく相槌を打ったが、正直よくわかってない。
ワーウルフの女性陣は大きな鍋に大量のコメを入れ、よーく洗ったあと水と一緒に弱火にかけた。
その横では別の鍋で、肉と野菜の炒め物やゴロゴロした野菜を入れたスープを作っている。あっちの料理はわかりやすいな。
やがて、コメを入れた鍋がシューシューと音を出し始め、白い泡が溢れてきた。
「鍋の中のコメが水を吸って、大きく膨らんでいるのです。まぁ、ご覧ください」
ヲルフさんに促され、鍋の近くへ。そして鍋を開けると……
「うわ……すげぇいい匂い」
固そうな白い粒だったコメが、ふっくらと炊き上がっていた。
ヲルフさんがヘラでコメをかき混ぜ、小皿に取り分けて俺に差し出す。

「アシュト様。味見を」
「……いただきます」
コメを一口で口の中へ……うん、美味い。柔らかくモチモチ、噛めば噛むほど甘い。
これ、なんにでも合いそうだ。スープカレーとかにも合いそう。
「美味しい……これが、コメ」
「はい、ワーウルフ族の自慢です!!」
ヲルフさんは、誇らしげに胸を張った。
ワーウルフ族の料理は、さっそくみんなに振る舞われた。
銀猫たちは食事もそこそこに、調理をしていたワーウルフのおばちゃんに群がり、コメを使った調理法を聞き出している。
「コメはどんな料理にも応用が利くよ。卵と炒めればパラパラになるし、塩気のあるものならなんにでも合う。余ったら握って固めれば弁当にもできるね」
「ふむふむ……あの、よろしければ、いくつかレシピを教えていただけないでしょうか？」
「もちろんさ。ふふふ、銀猫族が真面目で勤勉って噂はホントみたいだねぇ」
ワーウルフのおばちゃんは楽しそうに笑っていた。
俺は、少し離れた場所に座るワーウルフ族の長老のところに行く。
「あの、このコメをうちの村と取引してほしいのですが」
「もちろん構いません。コメだけは山ほど備蓄してあるので、いくらでも差し上げますよ」

「いえ、いただくのはさすがに。こちらから差し上げられるものは……」
長老と話し合い、うちからは果実とワインを交易品として出すことになった。なんでも、ワーウルフ族の村では果物類を育てていないらしく、森で採取するのがほとんどだから貴重なのだとか。
それとは別に、長老からお願いを受けた。
「アシュト様は素晴らしい薬師とお見受けします。此度も我らワーウルフ族の危機を救っていただいて、感謝してもし切れません」
「いやいや、そんな……ははは」
「そこで、お願いがございます」
「はい？」
その言葉を受け、長老の隣にいた青年……いや、ギリ少年くらいか？　が、一歩前に出た。
灰色の髪にメガネをかけた、大人しく優しげな男の子だ。たぶん十五、六歳くらいだろう。
「初めまして。フレキと申します」
フレキと名乗った少年は、丁寧に一礼する。
すると、長老が言う。
「この子は薬師見習いでして、ワーウルフ族イチの秀才なのです。どうかアシュト様、この子をあなた様の弟子にしていただけないでしょうか」
「え？」
「お願いします。ボク……アシュト様、いえ、師匠のような薬師になりたいんです!!」
フレキくんが目を輝かせて言った。
お、俺の弟子？　ま、まじで？

第四章　ワーウルフ族の少年フレキ

翌朝、俺たちはコメをたっぷりセンティに積み込み、村に帰ることにした。ワーウルフ族の村はもう大丈夫だろう。
出発直前、ワーウルフたちは村人総出で見送りに来た。
俺はセンティに乗る前、長老とがっちり握手する。別れの挨拶としてだけではなく、これからの取引相手としての握手でもある。
「アシュト様、本当にお世話になりました。大した礼もできずに申し訳ない」
「いえ、このコメをいただけただけで嬉しいです。それと、これからよろしくお願いします」
「はい。我々ワーウルフ族一同、困ったことがあれば力になりますぞ」
「ありがとうございます」
「それと……フレキとアセナをよろしくお願いいたします」
「は、はい。その、俺にできることなら」
俺と長老の視線は、すでにセンティに乗っている二人のワーウルフへ。

一人は灰色の髪にメガネをかけた賢そうな少年、フレキくん。もう一人は十歳くらいの、灰色のロングヘアの少女、アセナちゃん。二人は兄妹である。

フレキくんだけでなく、アセナちゃんも来ることになったのはちょっとした理由がある。

ま、それはおいおい。

「では、失礼します」

「はい。では……」

「え」

なんと、長老は人狼へ変身。それが合図だったかのように、他の住人もほぼ全員が変身した。

俺がセンティに乗り込むと、人狼たちは雄叫(おたけ)びを上げる。

「ウォォォォーーーーーンッ!!」

「「「ウォォォォーーーーーンッ!!」」」

これが、ワーウルフ流の見送りというわけか。

俺は雄叫びにビビったセンティを促し、ワーウルフ族の村をあとにした。

◇◇◇◇◇

数時間で村に到着。数日ぶりに戻ってきた俺たちは、住人たちに歓迎された。

「ただいまー」

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「おかえりなさい、ご主人さまっ」

「お兄ちゃんおかえりー」

シルメリアさん、銀猫族の少女ミュアちゃん、魔犬族の少女ライラちゃんが最初に出迎えてくれた。シルメリアさん、ご主人様の出迎えをするのは自分が先だとでも言うように、みんなより一歩前に出ている。

そしてその後ろにいるのは……

「お帰りお兄ちゃん、身体は大丈夫？」

「お帰りなさい、アシュト」

シェリーとミュディだ。

疫病の蔓延(はびこ)っていた村からの帰りだからか、心配そうにしている。

もちろん、俺は病気にはかかってない。というか、実際の原因は毒だったわけだし、感染の心配はなかったな。

「お帰りなさい、アシュト」

「お兄ちゃん、おかえり」

「まんどれーいく」

「あるらうねー」

続いて近寄ってきたのはローレライとクララベル、マンドレイクとアルラウネだ。

こっちはいつも通りな感じ。でも、心配して泣かれるよりはいいか。
そして、全員の視線が俺の後ろにいる二人のワーウルフに移る。
ミュディが首を傾げ、代表して聞いてきた。
「その子たちは、お客さん？」
「お客さんというか、移住者かな。フレキくんとアセナちゃんだ」
俺がそう言うと、フレキくんたちは前に進み出た。
「初めまして。ワーウルフ族のフレキと申します。師匠のもとで薬師の技術を学ぶため、この村に来ました。どうかよろしくお願いします!!」
「初めまして。アセナと申します。兄さんのお世話役として来ました」
しっかり一礼するフレキくんと、ちょこんとお辞儀するアセナちゃん。
ミュディが驚きつつ尋ねる。
「し、師匠って……アシュトのこと？」
「はい!!　ボク、村を救ってくれたアシュト師匠のような薬師になりたいんです!!」
「ってわけで……はは、俺でいいのかなぁ」
師匠と呼ばれるのは照れくさい。
すると、シェリーが軽ーく言った。
「ま、お兄ちゃんなら平気でしょ」
「お、おいおいシェリー、無責任なこと言うなよ。師匠って言われても」

「……あのねお兄ちゃん。お兄ちゃんはビッグバロッグ王国の最年少薬師でしょ。お父さんはまったく興味を示さなかったけど、十六歳で薬師の資格を取って、十七歳で新薬を開発して博士号も取るってすごいことなんだよ？　王宮薬師に推薦するなんて話もあったんだから」

「……え、そうなの？」

「そうだよ。お兄ちゃん、研究、研究に勉強、勉強で、自分の評判なんてまったく興味なかったでしょ？　シャヘル先生、かなり落ち込んでたわよ」

「う……シャ、シャヘル先生か」

シャヘル先生は、王宮の温室の世話を任されていたエルフの先生だ。俺の薬師としての教師でもあったんだけど……なんの挨拶もしないままオーベルシュタイン領土に来てしまった。

今更だが、ビッグバロッグには世話になった人が山ほどいるのに、挨拶も碌にしていない。

と、その時フレキくんが目をキラキラさせて言ってきた。

「す、すごい……十六歳って、ボクと同じ年齢です。その頃から師匠は薬師として活躍されていたのですね!!」

「あ、あはは……まぁそうだね」

「改めて尊敬します!!」

フレキくんはそう言って頭を下げる。

なんというか、素直でいい子なのかも。

「とりあえず、住む家を手配しようか。シルメリアさん、空き家はあったよね」

「はい。お弟子さんということなら、ご主人様のご自宅に近い方がいいでしょう。さっそく手配いたします」

「よろしくお願いします。それと……」

俺は、ぴちっと立っているアセナちゃんを見た。

「兄さんのお世話はわたしの仕事です。お任せください」

「あー……いいの？　フレキくん」

「はぁ……アセナ、お前はまだ半人前なんだ。あまり無理は……」

「していません。炊事洗濯などの家事は一通りこなせます。兄さんは何も気にせず、薬師としてのお勉強をしてください」

ツンとした口調で喋るアセナちゃん。

そんな彼女を、ミュアちゃんとライラちゃんが興味津々といった風に見ていた。

同年代の女の子だし、友達になりたいのかも。

「兄さん、わたしのことはお気になさらず」

「……はぁ、まったく」

フレキくんは頭を抱えてしまった。

本来、アセナちゃんはここに来る予定じゃなかった。

フレキくんは家事がまるでできない。銀猫族のサポートを提案したが、年頃の少年だし、若い銀猫族にあれこれしてもらうのはさすがに恥ずかしいらしい。

そこで、家事をこなせる妹のアセナちゃんも一緒に連れていくことに……というのは建前だ。
フレキくんがあとでこっそり教えてくれたのだが、お兄ちゃんっ子のアセナちゃんは、フレキくんと離ればなれになるのが寂しかったらしく、出発前夜に無理矢理同行をお願いしたとか。
フレキくんはこっそり話しかけてくる。
「申し訳ありません師匠。しばらく二人で生活してみます。どうしても無理なようならば、お手伝いをお願いするかもしれません」
「ああ、わかった。その時は遠慮しないで頼ってくれ」
「はい。ありがとうございます」
それにしても、俺が師匠か……
成り行きで受けたけど、師匠と呼ばれるからにはちゃんとやらないとなぁ。ワーウルフ族の村には薬師がいないらしいので、フレキくんを育てて、ワーウルフ族の村の薬師第一号にするつもりだ。
まあ先のことは置いといて、とりあえず今日は歓迎の宴(うたげ)を開こうかな。

第五章　アシュト師匠と弟子のフレキ

「おはようございます、師匠!!」
「うおっ」

翌朝。温室の手入れに行こうと家を出たら、フレキくんがドアの前で待っていた。
朝から目をキラキラさせて俺を見ている。
「お、おはようフレキくん。早いね」
「はい!!　師匠が早朝に温室の手入れをすると昨夜仰っていたので、こうしてお待ちしていました!!」
「そっか。やる気いっぱいだね」
「はい!!」
やる気満々なのはいいことだ……というか声デカいね。
俺に学ぼうと、慣れ親しんだワーウルフ族の村から出てきたフレキくん。
同族のいないこの村で暮らすのは何かと不安だろうが、早く一人前になって帰れるように、俺の教えられることはしっかり教えようと改めて決意する。
「よし、じゃあ行こうか」
「はい!!」
「温室の手入れをしたら朝食だけど、朝ご飯はどうする?」
「あ、それなら大丈夫です。アセナが作っていますので」
「え、あ、アセナちゃんが?」
「ええ。ああ見えて、アセナは料理上手なんですよ」
そう言ったあと、フレキくんの視線は俺の足元へ。

「おはようございます。ええと、マンドレイクさん、アルラウネさん」
「まんどれーいく」
「あるらうねー」
「今日からボクも温室のお手伝いをさせていただきます。どうかよろしくお願いします!!」
「まんどれーいく」
「あるらうねー」
「え、ええと」
「ああ、いいんだ。この子たちはこれで」
困惑するフレキくんの背を押し、温室へ向かった。
温室へ到着すると、さっそく一悶着(ひともんちゃく)あった。
『きゃんきゃんっ!!』
「おはようシロ、エサの時間だぞ」
『くぅぅん』
村に来た当初よりも少し大きくなったシロ。フワフワした可愛い狼だ。
すると、シロを見たフレキくんの様子が一変した。
「まままままさか、ふぇふぇふぇフェンリルっ!?」
「お、わかるのかい？　まだ子供だけどね」
『くぅん？』

と、いきなりフレキくんは人狼へ変身し、シロに向かってジャンピング土下座した。
え、何してんのこの子。
「フェンリル様っ!!　まさかこのような場所で出会えるとはっ!!　私、ワーウルフ族のフレキと申します!!」
『きゃんきゃんっ!!』
シロはエサに夢中でフレキくんを見ていなかった。
というか、フレキくんの人狼形態を初めて見た。髪の色と同じ灰色の毛並みで、爪や尻尾(しっぽ)もちゃんとある。外してないから当たり前だけど、メガネはかけているね。
とりあえず、俺はフレキくんに尋ねる。
「あ、あの、フレキくん？　どうしたのさ」
「神狼(しんろう)フェンリル様は、我らワーウルフ族の守護神であらせられるのです。こうしてお目にかかれるとは師匠の村に来て本当によかったっ!!」
『きゃんきゃんっ!!』
感激するフレキくんを気にも留めず、シロはエサを完食。遊んでほしいのか俺の周りをぐるぐる走る。そしてマンドレイクとアルラウネは、すでに温室の手入れを始めていた。
「フレキくん、とりあえず俺たちも手入れをしよう。温室でどんな薬草を育てているか教えるからさ。それと、フレキくん用の温室も作るから、どんな薬草を育てるか今のうちに考えておきなよ」
「は、はいっ!!　も、申し訳ありません、興奮してしまって」

俺はシロを抱っこして、フレキくんと温室へ向かう。
シロが気になるのか、フレキくんはどことなく集中してなかった。まぁ初日だし、少しずつ慣れていけばいい。シロとは毎日顔を合わせることになる。
温室の手入れを終え、フレキくんは朝食を食べに自分の家に帰る。
俺たちも家に戻って朝食を終え、各々が仕事や遊びに出かける。
すると、フレキくんが再び家にやってきた。
「いらっしゃい。さっそく勉強と言いたいけど、まずは村を案内するよ」
「はい、よろしくお願いします」
「アセナちゃんは？」
「アセナは、掃除と洗濯をすると言っていました」
「じゃあ、一緒に連れていこうか。来たばかりでそんなに汚れてないだろうし、二人分の洗濯だけならすぐに終わる」
「わかりました師匠。ありがとうございます」
というわけで、今日は村の案内をする。

◇◇◇◇◇◇

「わたしは別にいいのに」

「アセナ、わがまま言うな。師匠が自ら案内してくれるんだぞ」
「あはは……」
可愛らしい言い合いをするフレキくんとアセナちゃんを連れて、村を回る。
二人には昨夜の宴会中に住人を紹介したけど、みんなの仕事ぶりを見せながらもう一度紹介しよう。そうすればさらに顔を覚えやすくなるだろうし、各住人がどんな仕事をしているのかがわかる。
まず、エルダードワーフとサラマンダーの仕事を見せた。
彼らは主に建築担当で、最近は村全体の整備にも力を入れている。
村の拡張をはじめ、公園や東屋の設置など。水場を設けたり、銀猫族たちのために花壇なんかも作ったりしている。
次はハイエルフの農園。
ハイエルフの主な仕事はブドウ園、果樹園、セントウ園の管理と収穫した果物の加工。その他にも、エルダードワーフ数人と一緒に麦畑の管理や酒造りをしている。
これは最近知ったことだが、ハイエルフの女性がまた三十人ほど増えていた。果樹園の規模を広げたおかげで手が回らず、住人を募ったらしい。
これからはハイエルフの里だけでなく、ワーウルフ族の村とも交易が始まるからな。人手はいくらあってもいい。
彼女らは俺の許可を取らず住人を増やしたことを謝っていたが、怒るつもりなんてサラサラない。
続いて向かったのは、ミュディと魔犬族の少女たちの製糸場。

ここでは布製品を作っている。普段着る服や下着、シーツや毛布などだ。手が空いた人はオシャレな服や布製の小物を作り、ディミトリの館の商品と交換している。最近はライラちゃんも手伝い始めたそうだ。

噂では、ミュディがデザインした服やスカーフが、魔界都市ベルゼブブで流行しているのだとか。ブラックモール族の仕事は村の外での鉱石採掘なので、通りかかった人に挨拶するだけ。

銀猫族も村中を回っているので、こちらも挨拶だけ。

ハイピクシーたちは散歩しているのか、村にいなかった。

次は、村の目玉である村民浴場を案内した。

「風呂、ですか？」

「うん。エルダードワーフ自慢の浴場だよ。毎日自由に入っていいから」

「お風呂……？」

首を傾げるアセナちゃんに声をかける。

「アセナちゃんはお風呂には入ったことある？」

「ありません。水浴びだけです」

「なら、今夜は初入浴だね。シルメリアさんに入り方を教わるといい」

「はい、わかりました」

帰ったら、シルメリアさんに伝えておくか。

まだアセナちゃんは村人に心を開いてないようだけど、少しずつ慣れてほしい。

さて、俺にとっての一番の目玉はここじゃない。

お次は図書館に案内しよう。

◇◇◇◇◇◇

「これは塔、ですか？」

「おっきい」

図書館の外装を見て驚くフレキくんとアセナちゃん。

まぁ確かに、見た目は塔だよな。要塞にも見える。

「ま、中に入ればわかるさ。どうぞ」

二人を伴い館内へ。

そこには、壁一面が本棚になっている空間が広がっていた。うん、いつ見ても素晴らしい。そして落ち着く。

「す、すごい……これだけの蔵書、見たことないです!!」

「ふわぁ」

「ふふ、すごいだろう？　ここには薬草関係の本もたくさんあるから、フレキくんのいい勉強場所になると思う」

「おお……」

フレキくん、目をキラキラさせているよ。
図書館では、今日の仕事を終えた銀猫たちが私服で本を読んでいる。テーブルにはベルゼブブ産の飲み物、カーフィーの入ったカップが置いてある。
銀猫たちは俺を見て立ち上がろうとするが、手で制した。『ここを利用する者に上下関係はない。読者は平等であれ』をルールにしてある。
「おや村長」
「そして新しいワーウルフのお方」
「何か本をお探しですか」
「よろしければお望みの本を」
「「探して参りましょう」」
悪魔司書四姉妹が、抜群のコンビネーションでやってきた。
横一列に並び頭を下げる姿は、まるで分裂したかのようだ。
「お前たちも相変わらずだな……もしかしてワザとやってんのか？」
すると、ミュディが作った司書服を着たローレライもやってくる。
「あらアシュト、本をお探しかしら？」
「やあローレライ。今日はフレキくんとアセナちゃんの案内なんだ」
「そうなのね。ゆっくりしていって」
ローレライは、ミュディとは違うタイプの美少女だ。

ふんわりとした綿毛のようなミュディ、なめらかな絹みたいなローレライ、ってところか。いやいや、俺は何を考えている。
「す、すごい。これだけの本、ワーウルフの一生で読めるかどうか……改めて、ここに来たのは正解でした」
フレキくんは図書館に夢中のようだ。気に入ってくれて嬉しいね。

第六章　フレキの勉強

翌日。フレキくんと一緒に温室の手入れをしたあと。
今日から本格的に薬師としての指導をする。
場所を温室から診察室に移し、はじめにフレキくんにいろいろ質問することにした。ちょっとした面接みたいな感じだ。
「まず、フレキくんはどうして薬師になりたいの？」
「実はボク、ワーウルフ族の中でも弱い方で、狩りとか力仕事が苦手なんです」
ちょっと意外な話だ。
昨日見た人狼の姿は勇ましく、爪や牙も鋭かったのに。
「兄さんや姉さんはワーウルフ族の中でも特に強く、狩りでとても活躍していました。でもボクは、

本を読んだり勉強したりするのが好きで……家族からは、あまりよく思われませんでした」
「……」
なんだろう。俺、とても共感できる。
「ワーウルフ族の村に本は少なかったんですが、薬草について書かれた本が一冊ありまして、ボクは毎日それを読んでいました。村の外には本に書いてある薬草が自生している。この目でそれを見てみたい、そう思っていた時……兄さんの一人が、狩りで大怪我をして帰ってきたんです」
「えっ……」
「ワーウルフ族は体力があり、怪我をしてもすぐに治ります。ですが、兄さんの怪我はワーウルフ族の回復力をもってしても治らないような酷いものでした。そこでボクは薬草の本を思い出して、怪我の治療に使える薬草を探し出し、見様見真似で調合して兄さんの手当てをしたんです」
「……」
「兄さんの怪我は無事に完治して、初めてボクは家族に感謝されました。そしてそのことを知った長老がボクに、薬師を目指してほしいと言ってきて……ようやくボクの存在が認められたと思いました」
「……なるほど」
「ですが、この間起きた疫病には、手も足も出ませんでした。ボク自身も病におかされて、命を諦めかけた。そんな時に師匠が現れ、ボクと村を救ってくれたんです」
フレキくんは目をゴシゴシ拭った。

俺は、フレキくんから目を離さなかった。
「そこで、ボクは決めたんです。この人から、アシュト師匠から学ぼうと。ワーウルフ族の薬師として一人前になれるまで、この人のそばで修業しようと」
「……」
「以上です、師匠」
いや、もう何も言うことないわ。
この子はすでに、薬師としての心構えができている。技術さえ磨けば、立派な薬師となるだろう。
「わかった。ありがとう」
「は、はい」
「よし、さっそく仕事をしよう!!　まず、ここにある薬品を説明する。わからないことは俺に聞くように」
「はいっ!!」
俺はこの子を育てる。改めて決意した。

◇◇◇◇◇◇

薬品棚の薬や、試験管と瓶に保存してある薬草を一つずつ説明していく。
フレキくんはメモを取りながら、知らない名前の薬草や薬があったらその都度質問してきた。

知識に貪欲なのはいい。萎縮して質問できないようだったら逆に注意していた。
「あ、火傷用の軟膏がなくなりそうだ。よしフレキくん、一緒に材料を採りに行こう」
「はい!!」
木製のボウルを持たせて外へ出る。
歩きながら、フレキくんに軟膏の材料がなんなのか考えるように言ってみた。
「火傷に効く薬草といえば……ええと、アルォエの葉ですか？」
「半分正解。アルォエだけでも火傷の軟膏になるけど、もう一工夫するんだ」
「ええと……火傷、火傷。う〜ん」
「ふふ、わかるかな？」
フレキくんはブツブツ言いながらあれこれ考えている。こういう思考が大事なんだ。
それから十分ほど歩き、俺の個人農園に到着した。
農園には、何本かの太い木が植えてある。
俺はそのうちの一本に触れた。
「これこれ、この木だよ」
「この木、ですか？　この木の葉っぱが薬草？」
「残念。葉っぱじゃないんだ」
「え？」
俺はナイフを取り出し、木の幹を傷つけた。

ここまでして、フレキくんが気付く。
「そうか、樹液!!」
「正解。フレキくん、ボウルを」
「は、はいっ」
木の幹から、トロ〜ッとした樹液が流れ出てくる。
薄茶色の蜜は粘度が強く、乾くとパリパリになる。これとアルォエの果肉と果汁、それと数種類の薬草を混ぜ合わせると、火傷に効果のある軟膏になるのだ。
「薬師が扱うのは薬草だけじゃない。大自然の恵み全てを薬にするんだ」
「……」
「この木は再生力が強いから、幹を傷つけても数日で塞がる。とはいえ、樹液は木の血液だから、あまり多く採取しないようにね」
「はいっ!!」
樹液を採取し、農園の畑に生えているアルォエの葉も摘んでいく。
材料を手に入れ、俺たちは診察室へ戻ってきた。
調合はフレキくんにやってもらおう。
「この軟膏は、エルダードワーフたちが特に多く使う。彼らは鍛冶仕事が多いから、よく火傷するんだ」
「はい!!」

「じゃ、俺の言う通りに調合してみようか」
「わかりましたっ!!」
俺の指導のもと、フレキくんが軟膏を調合する。
ただ混ぜ合わせるだけじゃない。決められた手順と分量を守って混ぜる。
出来上がった軟膏をスライム製の小瓶に分けて入れ、フレキくんが初めて作った薬が完成した。
確認したが、ちゃんとした薬になっている。
「お疲れ様。これでばっちりだよ」
「……へへっ」
お、フレキくんが笑った。
うんうん。自分で材料を採取して作った薬だ。嬉しくないはずがない。
その時、診察室のドアがノックされ、鍛冶仕事をしているエルダードワーフのマギヌさんが入ってきた。
「おーう村長。ワリーがまた火傷の薬をくれねぇか。火傷でピリピリするとどーも手元が狂う」
「ちょうどよかった。今作ったのがありますよ」
「え、あ、あの」
フレキくんがワタワタしだした。
マギヌさんはフレキくんが作った火傷軟膏の小瓶を受け取る。
「おう、サンキューな。もらっていくぜ」

「あ、あの!!　その薬……師匠じゃなくて、ボクが初めて作ったものなので……」
フレキくんの言葉に対し、マギヌさんはケラケラ笑った。
「なんでぇオメー、自分の仕事に自信がねぇのかよ？」
「い、いえ、そういうわけでは……」
「だったら胸張れや。オメーの初めて作った薬を最初に試せるなんて、ワシはラッキーだな。がっはっは!!」
そう言って、マギヌさんは帰っていった。
小瓶を片手でポンポンしながら、とても楽しそうに。
フレキくんは、その後ろ姿をずっと見送っていた。
「さ、フレキくん。仕事はまだあるよ」
「はいっ!!」
うん。立派な薬師の顔じゃないか。

それから座学を行い、お昼の時間になった。
フレキくんは、アセナちゃんがご飯を作っているので家に帰るという。
キリがいいし、今日はこのまま上がりにした。家で復習をするもよし、図書館で勉強するもよし、アセナちゃんと遊ぶもよし。自由な時間があれば心身ともに楽だろう。
俺はシルメリアさんと二人で、卵と野菜と一緒に炒めたコメを食べていた。子供たちはエルミナ

立ち読みサンプル
はここまで